

用語説明 Glossary (五十音順)

亜高山帯(あこうざんたい): ブナ帯より上に成立する森林帯で、ダケカンパなどの落葉広葉樹やシラビソなどの針葉樹林で構成される。中部地方以北の本州や四国の高山にはみられるが、中国山地には存在しない。

亜種(あしゅ): 同一種であるが、分布域の異なる複数の集団が何らかの外部形態形質で互いに区別できる場合、それらに正式な学名をつけて区別している場合がある。それを亜種という(これは動物分類学で用いられる亜種の定義であって、植物の亜種は意味が少し異なるので注意)。例) *Chamalycaeus nakashimai nakashimai* Minato, 1987クビレイトウムシオイガイと *Chamalycaeus nakashimai ditacaesus* Minato & Yano, 2000ヒョットコイトウムシオイガイは互いに同一種の亜種。最初に新種として記載されたほうの特徴をもつ亜種を基亜種または原名亜種とよび、種小名と亜種小名が同じになる。

雨覆(あまおおい): 鳥の翼の風切り羽の基部をおおう羽。

移行帯(いこうたい): 交雑帯と同義。交雑帯は、厳密には、以前は異所的であった2つの集団が二次的に接触してできたものを指すが、生成過程の推定は困難であることが多く、近年は「移行帯」と「交雑帯」という2つの用語はあまり区別されない。

異所的(いしよてき): allopatric。2つの種(または同種の地理型)の分布域が異なっていること。

銀杏羽(いちょうばね): オシドリの雄の側面から上方に突出してみえる橙色のイチヨウの葉の形の羽のこと、三列風切の1枚に相当。

遺伝子汚染(いでんしおせん): 外部からの同種の移入集団との交雑によってある集団の遺伝子プール(全遺伝子の集合)に外来の遺伝子が流入してその集団本来の遺伝子構成が乱れること。

クイーン: 社会性昆虫(ハチ, アリ)の女王のこと。

羽衣(うい): 鳥が身につけている羽毛の全体のこと。

エコトーン: 2つの生物群集(とくに植物群落)または2つの生態系の境界に生じる移行域のこと。たとえば林縁は森林生態系と草地生態系を仲介するエコトーン、水辺は河川生態系あるいは湖沼生態系と陸上生態系の間のエコトーンとなる。このような場所では、一般に生物の種多様性が高くなる。

S型淵(えすがたぶち): 河川の中で瀬(せ)よりも水深の深いところを淵(ふち)というが、その中で、底質の柔らかいところが深く掘れてできるもの。上流域ではこのタイプの淵が連続してみられ、滝壺はその典型。

過眼線(かがんせん): くちばしの付け根付近から眼をとって後ろにのびる細長い斑紋。ふつうは黒または暗色。

学名(がくめい): ラテン語で記述され国際的に使用される学術上の名称。Mammalia(哺乳綱), Primates(霊長目), Hominidae(ヒト科)などはいずれも学名である。種の学名は属名と種小名の2語で構成される。ヒトという種の学名は *Homo sapiens* (*Homo* がヒト属, *sapiens* は思慮深い, 賢いという意味のラテン語の形容詞: これで「かしこいヒト」という意味)。本書では学名の命名者名とその学名の出版年を合わせて表記した。これが括弧つきで表示されていれば、その学名は著者のオリジナルの名称から属名が変更されていることを意味する。著者名の前に単語が3つ並んでいる場合は、3番目は亜種小名を示す。

河川残留(かせんざんりゅう): 本来は淡水と海水の間を回遊する魚が、海に戻らず淡水域で一生涯を過ごすこと。一代限りでなく、代々そのような生活を繰り返すようになった魚はとくに陸封魚(りくふうぎょ)とも呼ばれる。

極相(きょくそう): 遷移の最終段階にあらわれ、攪乱のない限りそれ以上他の植生に変化しない植生のこと。極相がどのような植生になるかは場所によって異なり、鳥取県の平野では極相はタブノキなどの常緑広葉樹林、1000m以上の山地であればふつうブナ林になる。

クライン: 勾配のこと。ある形質が地理的な勾配をもって変異するとき(たとえば、体のサイズが生息地の標高が上がるにしたがって減少するような傾向のみられるとき、この傾斜をクラインという。

原生林(げんせいりん): 攪乱を受けず極相になった林のこと。二次林。二次林も長年攪乱されずやがて極相に到達すれば原生林となる

交雑帯(こうざつたい): ある形質で区別できる分布域の異なる2つの集団の分布境界で、その形質に関して両者の中間状態を示す個体がふつうに見つかる場合、これを交雑帯(または移行帯)とよぶ。染色体交雑帯では、たとえば染色体数が $2n=18$ の集団と $2n=20$ の

集団の交雑帯の中にある集団では $2n=18$, $2n=19$, $2n=20$ の3者がいろいろな頻度で見つかる。この場合、もし両者の間に生殖隔離がある程度発達していて $2n=19$ の個体がきわめて稀であれば、それはふつう交雑帯とはよばない。

固有(こゆう): その地域にしか分布していないこと。日本固有種は日本にしか生息せず、国外のどこにもみられない種のこと。鳥取県固有種は鳥取県以外には分布しない種のこと、「県内の生息地の絶滅」が、即「種の絶滅」を意味する。

コリドー: 回廊の意味。動物の複数の離れた生息場所間の移動を可能にする通路のこと。

個体群(こたいぐん): 集団(population)のこと。ある場所にみられる同種の個体の集合。

ディスプレイ: 他の個体(ふつうは異性)の注意をひきつけるためにおこなう特別な行動。誇示(こじ)。

遡河回遊(そかかいゆう): 淡水で生まれ海に下ったのちに産卵のために再び淡水に戻る。サケ・マス類にみられる。

さえずり: 繁殖期に雄が雌に求愛するときに出す、独特の鳴き声。

地鳴き(じなき): さえずり以外の鳴き声。単純で短い。

種(しゅ): 自然状態で他の種からは生殖的に隔離されている、少なくとも潜在的には互いに交配が可能な個体の一群。

初列風切(しよれつかざきり): 翼の骨格に直接くっついている大きくてかたい羽(風切り羽)のうち、ヒトの手の平に相当する部分の骨についている羽をさす。ふつうは10枚。飛行時には推進力を生む。止まっているときは、翼の先端に見える。

次列風切(じれつかざきり) 風切り羽のうち、肘にあたる部分の骨につくものを次列風切という。飛行時には揚力を生む。

遷移(せんい): ある場所の植生が時間の経過とともに自然に別の植生に移り変わってゆくこと。

全長(ぜんちょう): 哺乳類では口先から尾の先端(毛は除く)までの長さ(尾長をのぞいたものが頭胴長)。鳥類ではくちばしの先端から尾の先端までの長さ。

側所的(そくしよてき): parapatric。2つの種(または同種の2つの地理型)の分布域が境界を密に接している状態のこと。

側扁(そくへん): 魚の体の横断面の左右方向が上下方向よりも短いこと。

旅鳥(たびどり): 夏季はより北方まで移動して繁殖、越冬はもっと南方でおこなうため、その場所では春季あるいは秋季の渡りの時期にしか観察できない鳥。渡りのルートは春と秋で異なる場合がありうる。

挺水植物(ちゅうすいしょくぶつ): 浅い水辺に生え、根は水中の地面下にあり、葉や茎の一部または全体が空中にのびている植物。ヨシ、ガマ、ハスなど。

沈水植物(ちんすいしょくぶつ): 根は水底に固着し、体の全部が水中にある植物(いわゆる水草)。クロモ、エビモ、シヤジクモなど。

同所的(どうしよてき): sympatric。2つの異なる種が同じ場所で共存していること。

夏鳥(なつどり): 他所から夏に飛来してきてそこで繁殖をおこなう鳥のこと。

二次林(にじりん): 一度、伐採された跡地に生じた林。原生林

ねぐら: ねむったり、休息したりする場所。

年1化(ねんいっか): 昆虫やクモが年に1回の頻度で世代を繰り返すこと。

年2化(ねんにか): 昆虫やクモが年に2回の頻度で世代を繰り返すこと。

バンディング: 鳥の渡りの調査のため、脚輪で個体に標識をつけること。

眉斑(びはん): 眼の上に横に伸びる斑紋。

漂鳥(ひょうちょう): 渡りをしないが、夏季には高標高地に移動して繁殖、冬季に平地におりて越冬するなど、小規模の移動をする鳥。

パー・マーク: サケ類の幼魚(ふつうは)の体側にみられる1列に並ぶ小判型の斑紋のこと。

ハプロタイプ: 染色体の特定の位置(複数遺伝座)に密接に連鎖して存在する対立遺伝子(allele)の一群のこと。

ビオトープ: 「生物」を意味する「Bio」と「場所」を意味する「Tope」を合成したドイツ語で、野生の動植物が生息・生育できる空間を類型化した概念(生物生息空間の単位)。

ピットフォールトラップ: 地表徘徊性昆虫などの採集

に用いられる落とし穴のトラップのこと。紙コップなどが利用される。

富栄養化(ふえいようか): 湖や河川が、農地の化学肥料や生活排水に由来するリン酸塩や硝酸塩などの流入で栄養過多になる過程。アオコなどの大量発生を招き、酸素不足や毒素産成も生じて淡水魚などの大量死亡につながる。

冬鳥(ふゆどり): 夏季には他所で繁殖し、越冬のため飛来する鳥のこと。

ミトコンドリアDNA(-ディーエヌエー): 細胞内の呼吸装置であるミトコンドリア内に存在する環状のDNAのこと。その塩基配列は細胞の核内にあるDNAより変異しやすく、同一種内の集団間や近縁種間で系統を調べるときによく用いられる。

ミユラー型擬態(みゆらーがたぎたい): 複数の有毒な種が互いに体の形や模様や色を似せること。捕食者はその姿の動物は味が悪いということを学習する機会が増えるという利点がある。

迷鳥(めいちょう): 本来の分布域でないところに迷って飛来した鳥。

迷チョウ(めいー): 本来の分布域でないところに迷って飛来したチョウ。台風などで受動的に遠隔地にまで運ばれるケースが多い。

模式産地(もしきさんち): 基準産地あるいはタイプ産地ともいう。ある種が新種として記載されるときに、記載文のもとになる1個体の標本(正模式標本)が採集された場所のこと。これは分類学上のいろいろな問題を解決するうえで不可欠な情報であり、模式産地の環境は最大限保全されることが望ましい。

留鳥(りゅうちょう): 同じ地域で1年中生活する鳥。実際には小規模の移動で季節により個体の入れ替わりがある可能性があるものが含まれるかもわからないがそれが検知できないかぎり、この名前で呼ばれる。

両側回遊(りょうそくかいゆう): 淡水で生まれたのち海に下り、産卵とは無関係に再び淡水に戻る。淡水産ハゼ類の多くやアユなどでみられる。

ワーカー: 社会性昆虫の働きバチまたは働きアリのこと。膜翅目ではこれは遺伝的には雌であるが、ふつうは不妊で自分では子を産まない。